

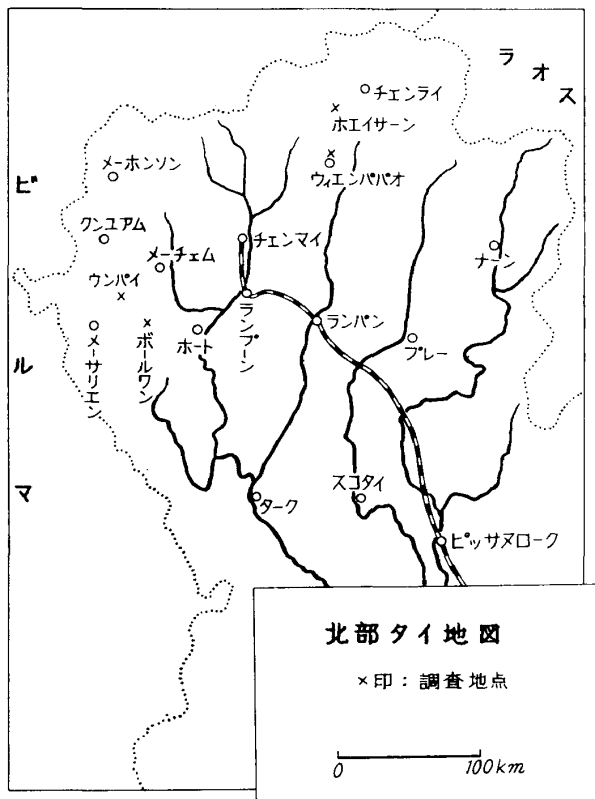
ラワ語の現地調査

三谷 恭之

1 はじめに

私たち4人のグループも事実上すでに解散した。4人というのは、タイ・ビルマ班の飯島助手、言語班の西田助教授、桂君それに私であって、いずれも今回の調査対象は北部タイの山地民である。昨年9月なかば言語班の3人がチェンマイについたとき、その前からカレン族の調査に手をつけておられた飯島さんの発案でホテルの一室を借切つてわれわれのリエゾン・オフィス(?)を設け、これがその後半年近く続いたわけだが、今ではすでに西田先生と飯島さんが帰られ、私自身も帰国まであとひと月たらずだから、本稿も現地通信というより今までの経過報告ということになりそうだ。

なお、このリエゾン・オフィスは何でもないことの



ようだが、これが今回の調査に大いにプラスした。荷物の保管やただの歓談の場所にすぎないのだけれど、村に入っている間も「帰る巣がある」という安心感があるし、ここでお互に得てきた知識の交換もできればバカ話やイタズラをしてゆっくりくつろぐこともできる。とくに私のように現地調査がはじめてのものにとっては、これが精神的な緊張の緩和にどれだけ役立ったか知れない。なお、これは今も桂君と2人で続けている。

2 ポールワン村

さて、アカ語・ラワ語など主としてチベット・ビルマ系の言語を調査される西田先生や桂君と別れて、私は9月末にまずチェンマイの南西約130kmにあるポールワンというラワ族の村に入ることにした。ラワ語はモン・クメル系の言語であって、これまで数編の論文があるにすぎず、それもあまり言語学的ではない。このポールワン村に入るにあたっては、チェンマイからメーサリエンにかけてすでに自分で歩いてよく知っておられた飯島さんのお世話になった。

この村は標高1000m前後のポールワン高原にあって、チェンマイからメーサリエン行きのバスで約5時間、バスを降りた所から見る村の景色はなかなか美しい。村は大きく(約250戸)、家もたいてい木の家でわりと大型である。村の中には雑貨を売る店もあれば機械精米をうけおう家もあって、本格的な山地民の部落からくらべればちょっとした町という感じだ。村人たちの服装もたいてい土地のタイ人(コン・ムアン)と同じで、ときには洋装の娘さんも見かける。この一帯のラワの村は古くからタイ人の影響を受けていたといわれるが、とくに数年前チェンマイ・メーサリエン間のハイウェイができてから一段とモダンになったようだ。

ことばの面でも同様で、たいていのものがカム・ムアン(土地のタイ語、北タイ語)を話せる。たまにカム・ムアンのよくわからない老年者を見つけたが、村人がタイ人と話すときはもちろん、彼らどうしてもカム・ムアンで話しているときがある。(ただ声調や母音の長短の対立はラワ語にそれがいないため多少あやふやで、タイ人にはやはりそれとわかるそうだ。)タイ・クラーン(標準タイ語)のできるものはほとんどいないが、今では小学校でも教えているし、ときには次のようなこともあった。



写真1 ピーの家（ボールワン）

ある娘さんが私と話すとき明らかに努力してタイ・クラーンで話そうとつとめていた。これはちょっと田舎のコン・ムアンと全く同じだ。彼らにとっては、タイ・クラーンはバンコックのことばというだけでなく書きことばつまり知識人のことばであって、それだけカッコイイのである。

しかし、もちろんこの村の第一言語はれっきとしたラワ語である。

私は村の小学校の教師の家に下宿して調査をはじめた。「問う」というのはどうかときくと「どこ行くか」と答えるし、「呼ぶ」はときくと「オーイ、こっちへ来い」といった具合で相手に仕事の意味を分からせるのに困ったが、約ひと月半ほどでだいたい輪郭がつかめた。

単語は CV(C) または cvCV(C) [C: 子音またはその結合, V: 母音またはその結合, cv: 強勢のない音節] を基本的な形としており、声調や母音の長短の対立がないのでその分だけ C や V の種類が豊富である。たとえば、C- では両唇音だけでも /p- ph- ?b- mb- m- ?m- hm-/ があり、-V(C) には /-a: -au/, /-a?: -au?/, /-ah: -auh/, /-ap: -aup/ といった対立も見られる。音節についた声調はなくふつう単語

を単独で発音するときは下降型であるが、一部の動詞では上昇型になるものがある。そのため /hlai?↘/ «雨» 対 /hlai?↗/ «雨が降る» といった対立の生じていることがある。しかしこれはむしろイントネーションのひとつと考えられるようだ。

文法体系はだいたい簡単で、名詞化の接頭辞 /pi-/ があるがモン・クメル系の特徴といわれる挿入辞はないし、統辞法も基本的には主語—動詞—客語、被修飾語—修飾語といった語順である。ただ、主語に対応して代名詞的小辞が述語動詞の次におかれたりする。

3 ウンバイ行き

ラワ族のもうひとつの中心地はウンバイだ。ラワ研究者の間でボールワンについて有名なところだ。言語についても Sanidh Rangsit の論文があってラワ語に関する文献では最もすぐれたものだが、いちばん基礎的な音素体系さえよくわかっていないのであまり資料とならない。そこで私は11月なかば、案内のタイ人を連れて行ってみることにした。

ボールワンの西どなりのコンローイという村からゾウで出発した。ウンバイはこの西北方約 30km の山中にある。何せゾウはのろいので、1日目はメーターというカレン部落にとまって2日目に到着した。途中ちょっとした森もあり山をいくつか越えるが、当のラワなら1日でゆうに歩く道のりである。ウンバイにはウンバイ・ルワンを中心としていくつかの部落がつづいているが私はバーンデンという小さい部落にとまった。

ここはさすが山地民の部落だ。地面はブタやニワトリのふんが層をなしてきてきたないことこの上ない。雨期になれば大変だろう。バーンデンは小さいので通りというものはないが、ウンバイ・ルワンやチャンモーは1本の通りをはさんで家が並んでいる恰好の村で、通りにはところどころピー（精霊）の柱が立っている。家や村人の服装も独特のもので、白っぽい上着に紺と赤と白の横じまのスカートで赤や銀の耳輪や首かざりをつけたラワ女性が、米かごや水くみ筒を背負って木かげからヒョイと現れると、ほんものの山地民がはじめての私は何かバカされたような気がした。

例の /mbuak krak/ というスイグユウを槍でつき殺してピーに供える儀式はひと月ちがいで見そこねたが、たまたま家のおほらいがあったのでその祈とうを

録音して後で訳させた。善いピーに向って、この通りごちそうするから悪いピーから守ってくれと頼む主旨なのだが、細かい点では当のラワもこれはピーのことばだからわからないという。

ウンパイ・ラワ、とくに女はタイ人と接触することがあまりないからだろうか、カム・ムアンはあまりできなかつた。しかし男は意外に流暢に話す。私の受けた印象ではボールワン・ラワほどうまくはないが、同行のタイ人などは（ボールワンのカム・ムアンもタイ人には余り完全でないからでもあろうが）同じくらいだといっていた。もちろん、タイ・クラーンはだめだが、そのかわりカレン語（スゴー）ができるという。ラワ族のカレン語の方がカレン族のラワ語よりうまいと自分で言っていたのは、確められなかったが興味をひく。

私は約1週間滞在して帰ることになったが、まだもっと調べたかったのでインフォーマントを1人あとでボールワンに来てくれといった。そうすると約束の日にちゃんとやって来て12月なかばまで約2週間協力してくれた。ある日、村の人がこども連れで山を越えてひょっこり訪ねてきたこともあった。

ボールワン・ラワとウンパイ・ラワは互に自分の方言で話す。だいたい通じているようだ。といっても両者はかなりちがっていて、比較言語学的には大いに興味がある。《手》BL./tai?/UP./te?/のように母音はウンパイの方が簡単だが-VCの種類はウンパイの方が豊富で、《鳥》BL./saiñ/UP./saim/のように後者によってはじめてモン語 /həcem/ などとの関係に気づくといった場合が多い。予想通り概してウンパイの方が古形を保っている。

4 カメート語

ごく大ざっぱにいて、メーサリエン・クンユワム・メーチェム・ボールワンを結ぶ四角形の中にはラワ族の村がまだまだある。その中には極めて興味深い方言もあるかも知れないし、実際に調査してみなければ絶対に何ともいえないけれども、その大部分はまずウンパイやボールワンと著るしく異なることはないだろうと考えて、今度は少し離れてウィエンパパオの「ラワ」とよばれているものに手をつけることにした。

ウィエンパパオはチェンマイの北東約90km、チェンライまで乾期だけ通るバス道路のなかほどの町で

ある。たいていの本にはこの地方の「ラワ」は完全にタイ化してしまったとあるし、チェンマイでもそうきいていたが、目指すパンチョーク村は町から約5kmほど北にあって、そこではまだ「ラワ」語は生きていた。そこで、1月末に入って2週間ほど調査した。

「ラワ」語が生きているといっても家族内などだけで、村の約30戸のうち10戸ほどはコン・ムアンの家であるし、町から5kmくらいしかはなれていないので彼ら自身カム・ムアン（チェンライのそれだが）を話す機会の方が多いようだ。

村は東半分つまりバス通りに近い方にだいたい1軒ごとに垣根のあるコン・ムアンの家が集まり、奥の西半分に彼らの家があって数軒を1つの垣根で囲ってある。村全体あまり裕福でなく近くのスズ鉾で働いたりチェンマイやチェンライに働きに出ている。

さて、この村の住民の自称はカメートまたはラワ・カメートである。ラオスのカメート（ラメート）語のくわしい資料がないので困るが、タイ人のいう「ラワ」がコーラートのニャクオルやナーンのカティンを指すこともあるのと同様のケースであろう。確かにラワ語との共通要素も多いが全体としては明らかに別の言語である。少なからぬ点でカム語（カティン語などとも

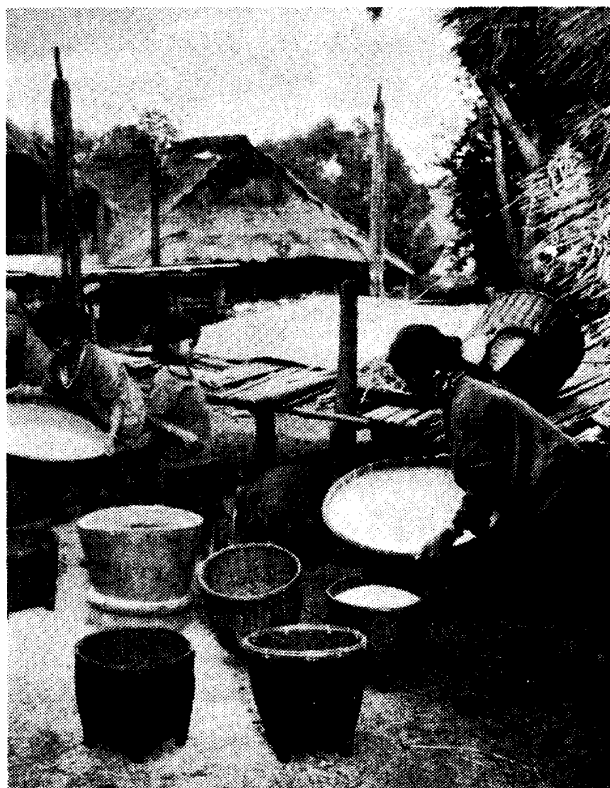


写真2 ラワの農作業（ウンパイ）

にいわれるカー諸言語のひとつ)に近い。ビルマのワ語のあるものはウンパイなどのラワ語に近く、他のあるワ語はウィエンパバオのラワ語つまりカメート語に近いといわれているので、ラオスのカー諸語からビルマのワ語まで広く調査しなければ確かな発言はできないが、少なくとも現在の段階ではこのカメート語がラワ語とカム語の中間に立つものと思っただけよい。一例をあげれば、《ウシ》BL./mɔup/ : Kmt./Npòʔ/ : Kmu./lmpòʔ/. 《木》BL./khɔiʔ / Kmt./kheʔ/ : Kmu./sʔɔŋ/.

単語の形は CV(C)/T, cv(c)CV(C)/T が基本的で、Tすなわち声調があるのはモン・クメル系には珍しいが、これはクメル語やモン語、カム語などにあるレジスターの対立に相当するものである。ラワ語よりも音素の種類が少ないのでききとり安かった。とにかく意外に重要な言語だ。

タイ人がすでになくなったといっていたのにパンチョーク村はあった。ひょっとするとまだほかにも思っているところへ、村の人がほかにも「ラワ」の村があるといい出した。タコー、ホエイサーン等々である。タコーについては「ラワ」という名でロロ系の言語があることはきいていたがホエイサーンほかは不勉強のためか初耳だ。村はあるがことばはもう忘れていたかも知れないともいうが、当のカメートの例がある。もしかするとウンパイよりもっと古形を残した古いラワ語の生き残りがあるかもしれない。それで、この村からバスでさらに北に向った。

5 ビス語

タコーはパンチョークから 10km ばかりだからすぐに着いた。ところが、村(町?)はコン・ムアンばかりで今度は本当に「ラワ」なぞいそうにない。やっと数人「ラワ」語を覚えている人に出会った。つまり現在では話されているのでなくわずかに“覚えている”人がいるだけだ。ともかくその1人をインフォーマントとして調査した。たしかにチベット・ビルマ系だが自称は「ビシュ」だった。このインフォーマント氏の記憶もはなはだ怪しいので1日で打ちきり、ホエイサーンに行くことにした。

ホエイサーンはタコーからさらに北東 45km ほど、チェンライの南西 25km くらいの地点にある。「ラワ」族の村は山のふもとにあった。村人の服装などコン・ムアンと変わらないが、ここでは「ラワ」語はいた

って健在だ。いったいどの系統の言語かも分からないので、村へつくなり《魚》はどういうか尋ねた。モン・クメル系ならまず /ka/ に近い単語をいうはずだったからだ。ところが /lɔŋtɛ/ という。昨日の「ビシュ」語の /lɔŋtɛ/ と同じだ。自称は /bisù/ だという。古いラワ語の生き残りではなかったのだからさか失望したが、とにかくはじめてきく言語名だ。今までチベット・ビルマ系としても何系としてもビス語という名はきいたことがない。単語だけでも記録して帰ろうと数日とどまった。

チェンマイに帰ってみると、ちょうど西田先生がタークでの仕事も終えてホテルにおられた。以上の話を報告すると大いに興味を示されて、あまり日もないがとにかく行こうということになり再びチェンライ経由で村に行き調査した。

この言語は2音節の単語が圧倒的に多く(形態素は1音節がふつう)、音節は CV(C)/T で、C-には /pj-, hmj-/ といったチベット・ビルマ諸語によくある音素結合がみられる。語順も多くのチベット・ビルマ諸語と同じく、主語—客語—動詞、被修飾語—修飾語などであるが、全体に文法体系は複雑である。語彙の多くはタイ系の借用語で西田先生を残念がらせたが、なかには他のロロ諸語にはみられないような古いチベット・ビルマ系の語彙があり、かなり特殊な言語のようだという事だった。

6 おわりに

今度の調査で、ビスのような副産物は別として、一応ラワ語・カメート語の基本的な構造がわかった。このほかたまたまムアンサイのカム語の語彙を若干採集する機会もあったが、次は何としてもナーン北部のカム語・カティン語などだ。それでやっとモン・クメル系のうち北部山地のグループの手がかりがつかめる。もちろんビルマのワやラオスのカーは分布地域も広く方言もずいぶんありそうだから全体から見るとほんの一部分だ。今回の調査は手がかりの手がかりだといっても過言ではない。

ほんの北部タイだけでも仕事は山ほどあって半年やそこらでできるものではない。そこへもってきて深くか広くかの問題がある。私は今度の調査でさえ多少ウロウロしすぎたのではないかと思っている。もうあと幾日もないが、せいぜい少しでも詳しくと思っただけ今後は再びボールワンに舞い戻っている。